

# Henry Fielding の greatness 観

—Alexander 大王と Marlborough 公爵をめぐって—

南 井 正 廣

## I

紀元前336年、Alexander 大王は、ペルシャ遠征のための全ギリシャ（スパルタを除く）同盟軍の将軍に選出された。その会議が催されたコリントの地で、彼がキニク派の哲人 Diogenes (of Sinope) と出会ったという話は、非常に有名であり、Plutarch は、この会見の内容として二つの対話を伝えている<sup>1</sup>。一つは、Diogenes の所へ行つて「何か所望するものはないか。」と尋ねた Alexander に、「それならば、わしは今、日向ぼっこをしているのだから、少し動いておまえが遮っている日がわしに当たるようにしてくれ。」という話。もう一つは、この Diogenes の俗世の権勢に対する傲然とした態度に感服した Alexander が、近習に「余がもし Alexander でなかったら、Diogenes でありたい。」と洩らしたという話である。現代の Alexander 学者達は、どちらも後世の偽作であると簡単に片付けてしまっている<sup>2</sup>。が、アジア遠征という野望を胸に秘めた、美しく誇り高い青年王と、俗世の権力や富に無関心であり、乞食のような身なりをして樽に住み、毒舌を揮う老人との対照の妙が、作家たちの想像力を掻き立てたことは言うまでもない。Plutarch や Arrian といった Alexander の伝記作者は無論のこと、Cicero や Seneca がその哲学論に取り入れ、さらには、ギリシャの諷刺作家の Lucian が『死者の対話』という文学形式の中でこの二人に対話をさせている。そして、この会見があったと想定される時から二千年以上の歳月が

流れているにもかかわらず、18世紀のイギリスでこの二人の誇り高き男たちの会話をもとに創作を行なった作家がいた。Henry Fielding である。彼は、1743年に出版された *Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One* の中で、*A Dialogue Between Alexander the Great and Diogenes the Cynic* という小品を発表している。

蔵書リストに、Plutarch, Arrian, Curtius 等の書いた Alexander の伝記類が含まれていることから判断すると<sup>3</sup>、Fielding がその出会いのことを知っていたのは当然のことであろう。また、Lucian が得意としていた対話形式を用いているのだから、Lucian の作品から多くのヒントを得ているという Henry Knight Miller の指摘も正しいと思われる<sup>4</sup>。しかしながら、Fielding は、過去の文学遺産をそのまま継承している訳ではない。最大の相違点は、彼が Alexander と Diogenes の対話の時代設定を変え、かなり膨らませて書いているという点にある。

時代設定の変更については、Fielding 自身が注を付して断っている<sup>5</sup>。そこでは、本来、アジア遠征の前に行なわれた会見を、Alexander がインドから帰国した時点に変えないと、この対話のための十分な材料が得られないので、故意にアナクロニズムを犯しているという主旨のことが述べられている。つまり、アナクロニズムを犯さないならば、独自のカラーで二人の対話を膨らますことができなかったということになる。その理由は、世界を征服した野心に満ち満ちた青年王と、すべての現世的な権力や富を嘲り笑う孤高の哲人とを対峙させ、双方の野心・高慢・偽善をお互いに暴かせ合うことにこの作品の真骨頂——Henry Knight Miller の言葉を借りるならば、Alexander と Diogenes が交互に “the exposor and the exposed”<sup>6</sup> の役割を果たしている——があるからと考えておけばいいであろう。Diogenes の方は、Alexander との会見の時代設定に変更があろうがなかろうが、彼の暴かれるべき悪徳は変らない。しかしながら、Alexander の犯した罪は遠征前と遠征後ではかなり違ってくる。アナクロニズムを犯さないと、彼の世界征

服が多く、国家の滅亡や多くの人々の死の上に成り立っているという前提のもとに、彼の悪徳を非難することができなくなる。実際、Fielding は、二人の対話を通してかなり激しく Alexander の破壊行為を強調している。「何か所望するものはないのか。余がその気になれば国の一つや二つくれてやるぞ。」と、Alexander が申し出たのに対し、Diogenes が「おまえのような奴が価値を置いている国なんてものは、何の値打ちもない。」と言ったものだから、以下のような激しい口論が始まる。

Alexander

Thou dost speak vainly in Contempt of a Power which no other Man ever yet arrived at. Hath the *Granicus* yet recovered the bloody Colour with which I contaminated its Waves? Are not the Fields of *Issus* and *Arbela* still white with human Bones? Will *Susa* shew no Monuments of my Victory? Are *Darius* and *Porus* Names unknown to thee? Have not the Groans of those Millions reached thy Ears, who but for the Valour of this Heart, and the Strength of this Arm, had still enjoyed Life and Tranquillity? Hath then this Son of *Jupiter*, this Conqueror of the World, adorned by his Followers, dreaded by his Foes, and worshipped by All, lived to hear his Power contemned, and the Offer of his Favour slighted, by a poor Philosopher, a wretched Cynic, whose Cloak appears to be his only Possession!

Diogenes

I retort the Charge of Vanity on thyself, proud *Alexander*; for how vainly dost thou endeavour to raise thyself on the Monuments of thy Disgrace! I acknowledge, indeed, all the Exploits thou hast recounted, and the Millions thou hast to thy eternal Shame destroyed. But is it hence thou wouldst claim *Jupiter* for the Father? Hath not then every Plague or pestilential Vapour the same Title? If thou art the Dread of Wretches to whom Death appears the greatest of Evils, is not every mortal Disease the same? And

if thou hast the Adoration of thy servile Followers, do they offer thee more, than they are ready to pay to every Tinsel Ornament, or empty Title? Is then the Fear or Worship of Slaves of so great Honour, when at the same time thou art the Contempt of every brave honest Man, tho', like me, an old Cloak should be his only Possession? (p. 228)

自分の説く “Wisdom” や “Virtue” は、「国々を荒廃させることや都市を焼き放つこと、人々から略奪し彼らを虐殺することではない。(p. 230)」といった調子で、この後の所でも、Diogenes からの激しい罵倒が続く。Fielding が二千年以上も前の題材を、わざわざアナクロニズムを犯して、このように Alexander の破壊を強調するという形で拡大していることには、どのような意味があるのだろうか。18世紀前半という時代背景を手掛かりにして、Fielding の Alexander 観を探り、彼が理想的な英雄の資質としてどのような事柄を考慮に入れていたのかを解明するのが本稿の目的である。

## II

*Dialogue* の中で Alexander による破壊を強調することは、どのような問題意識に起因するのであろうか。Alexander は、自らの征服戦争によって、自分は従者たちに敬愛され、敵からは恐れられ、すべての人に崇拜されるようになったのだと、終始主張し続けている。そして、“the Breath of that Multitude (p. 229)”こそが英雄にとっての “Honour” や “Glory”, 自国にいれば座っているだけで享受できる安楽・富・快楽・権力のすべてを擲ってまでも、危険を冒し困難に立ち向かって他国を侵略する英雄の、唯一の報酬なのだと言っている。このような “Glory and Honour, this Adoration of Slaves (p. 299)”を報酬とする破壊行為を Fielding は、どのように呼んでいるのであろうか。

自らに与えられるべき名誉に関して熱弁を揮う Alexander に向かって、

Diogenes は, “And is this mighty Soul [Alexander's Soul]. . . obliged at last to support its Superiority on the Backs of a Multitude of armed Slaves?. . . Hadst thou alone past into Asia, the Empire of *Darius* had still stood unshaken. (p. 232)” と答えて, Alexander の要求している名誉は彼ひとりで占有できるものではなく, 大王に随行した兵士全体で分かち合うべきものだと, 反論している。次いで, Alexander の軍は, 人類に “Mischief” をもたらす “brutal strength (p. 232)” という点で, Diogenes より優れているにすぎないのだと, Alexander 非難の手をゆるめない。最後には, “. . . what can be more miserable, than entertain Desires which we know never can be satisfied. (p. 233)” と, Alexander の満足なき欲望を見事に暴露している。つまり, ひとの褌で相撲をとって, 人類に禍をもたらし, 果てしない欲望を抱き続けることなどは, 何ら名誉に値しない。断じて, 英雄の資質などではありえないというのが, Diogenes の攻撃の骨子となっている。

Diogenes が暴き立てている反英雄的資質を一口で定義するには, どのような語が最適であろうか。 *The History of the Life of the Late Mr. Jonathan Wild* が<sup>3</sup>, この問題の解決に当たって大いに参考になる。大盗 Jonathan Wildこそが<sup>3</sup>, この反英雄的資質をさらに完璧な形で保持しているからである。Fielding は, *Jonathan Wild* の冒頭で, “greatness consists in bringing all manner of mischief on mankind. . . .”<sup>7</sup> と述べているし, 同第2巻2章では, “. . . the truest mark of greatness is insatiability.”<sup>8</sup> と, Wild の属性を喝破している。そして, 自分自身のためにもっぱら他人の手を利用する輩を, Fielding は, “. . . those who employ hands for their own use only; and this is that noble and great part who are generally distinguished into conquerors, absolute princes, statesman, and prigs.”<sup>9</sup> と評している。Alexander の反英雄的資質は, *Jonathan Wild* において “greatness” という名で総称されている性質にこのように符合す

る<sup>10</sup>。この Wild の “greatness” が, Heartfree の “goodness” と対照をなす “false greatness” であることは、今更、論じるまでもあるまい。従って, “greatness” という語に一家言を持っていた Fielding のことだから, Alexander の反英雄的資質を Diogenes に暴露させる際に, “false greatness” ——英雄に見られる偽りの偉大さ——という問題を常に念頭に置いていたことは容易に推測される。

### III

しかし, Fielding は死後二千年以上にもなる征服王を、何の前触れもなく突然に取り上げて、その “false greatness” を論じていた訳でない。F. Holmes Dudden が指摘しているように, Fielding の “greatness consists in bringing all manner of mischief on mankind” という考え方は、18世紀前半のイギリスの状況と密接に関連しているのである<sup>11</sup>。ここでは, Fielding が Alexander という歴史的人物に、破壊のイメージを与えた背景に迫ってみる。

17世紀後半から18世紀前半にかけて、二人の征服王がヨーロッパを席捲した。Louis 14世と Charles 12世である。1661年、23歳で親政を開始して以来、Louis 王は、フランドル戦争 (1667-68)、オランダ戦争 (1672-78)、ファルツ戦争 (1689-97)、スペイン継承戦争 (1701-14) といった具合に、侵略戦争を繰り返してきた。Richard Steele は、*The Spectator* の中で Louis 王を “an hardened Sinner whom I have very little Hopes of reforming, viz. Lewis XIV. of France”<sup>12</sup> と呼び、Philarithmus が寄稿した手紙を披露して、彼の征服戦争の空しさを徹底的に糾弾している。この見解を踏襲して、Fielding も1741年に発表した *The Vernoniad* という詩の中で、1715年に死んだ Louis 王のことを, “No more our Lewis spreads the iron chain,/ For Europe's neck. . . ”<sup>13</sup> と書き記している。

18世紀のイギリスに、そして Fielding に、さらに大きな脅威を感じさせ

ていたのは、若きスウェーデン王 Charles 12世であった。1698年、16歳で王位に就くとすぐに、デンマーク、ポーランド、サクソニアを制圧し、1709年ロシアの Pultowa で決定的な敗北を喫するまで、その勢いは止まらなかった。彼の残した足跡は、1731年に出版された Voltaire の *History of Charles XII* の中で、詳しく紹介されている。Voltaire は、その序文で悪い君主たちへの記憶がいつまでも失われないでいるのは、“... like fires, plagues, and inundations, they [bad princes] are remembered only for the mischief they have done.”<sup>14</sup> という理由からだと説明し、世の王たちが Charles 12世を反面教師としてくれればよいが、という主旨のことを述べている。

... we flattered ourselves that it might be of some little use to princes, should it [this work] ever happen to fall into their hands. No king, surely, can be so incorrigible as, when he reads the “History of Charles XII.,” not to be cured of the vain ambition of making conquests. Where is the prince that can say, I have more courage, more virtues, more resolution, greater strength of body, greater skill in war, or better troops, than Charles XII.? And yet, if, with all these advantages, and after so many victories, Charles was so unfortunate, what fate may other princes expect, who, with less capacity and fewer resources, shall entertain the same ambitious views?<sup>15</sup>

彼は、Charles 12世を決して極悪人呼ばわりした訳ではないが、Charles 12世の伝記を書く時に、征服欲旺盛な破壊者という面を無視する訳にはいかなかった。後に別の作品に於いても、“the one [Charles XII.] has left only ruins behind him. . . .”<sup>16</sup> と記していることから、Voltaire の Charles に対する終始変らぬ姿勢が窺える。この Voltaire の著作は、出版後まもなく英語訳され、1740年までに7回版を重ねた（1734年に翻訳された梗概も1739年と1750年に再版されている）<sup>17</sup> というのだから、イギリスで大評判

だったと言っても過言ではあるまい。この売れ行きから判断すると、“But upon English minds the deepest impression seems to have been made by Charles XII.”<sup>18</sup> という Aurélien Digeon の発言にも、信憑性が出てくる。Charles 12世のような征服者は、同時代のイギリス人にとって市民社会を脅かす元凶と映じていたのである。

Fielding 自身が、1740年に出版された Gustave Adlerfeld の *Histoire militaire de Charles XII roi de Suède* の訳者であったことも忘れてはならない<sup>19</sup>。Charles の軍事的功績や彼の破壊行為が3巻にわたって詳しく描かれている作品であるので<sup>20</sup>、この翻訳作業が、Fielding に彼独自の Charles 12世観、即ち英雄に見られる“false greatness”観を、抱かせる契機になったにちがいない。1741年に発表された、*Of True Greatness* という詩、1743年に出版された *Miscellanies* に含まれている *Dialogue* や *Jonathan Wild* といった作品の内容が“false greatness”と密接に関わっていることから、このことが推察される。

このような野心に駆られた破壊的な専制君主たちに対する脅威は、ひとり Fielding だけが感じていたのではない。古代からあったと言える。そして、17世紀後半に、Louis 14世や Charles 12世が抬頭してきたことによって、同時代の作家・思想家・哲学者たちが、一様に意識し始めたことなのである。その際に、より一層ポピュラーな人物、限らない破壊活動を途方もない規模で成功させたために、無知な民衆から称賛され神格化すらされている歴史上の人物——Alexander——が格好の攻撃目標となった<sup>21</sup>。実例として、Alexander 狂人説（Alexander の行動が狂気に帰因するという非難）の系譜を辿っておくことにする。

ローマ時代には、Juvenal が、世界征服をせずにはおれなかった Alexander の気質を語っている<sup>22</sup>。幾時代か経た16世紀には、フランスの随筆家 Montaigne によって、血の気が多く激しやすい Alexander 像が、紹介されている<sup>23</sup>。さらに17世紀の Boileau による Alexander は狂人だったという



指摘<sup>24</sup>。この Boileau の Alexander 狂人説は、曰く付きである。彼が諷刺詩第八を執筆していた1668年は、Louis 14世が侵略戦争を開始した翌年に当たる。この部分の諷刺の対象は Louis 王にあってと考えられる節がある。また、後年、Charles 12世が諷刺詩第八を読み、Boileau の Alexander に対する扱いに腹を立て、その本を引き裂いたという話も伝えられている<sup>25</sup>。ここにきて、Louis や Charles といった征服王が、Alexander という高峰に連なるひとつの山であったのがよくわかる。

18世紀のイギリスでは、Mandeville が1714年に *An Enquiry into the Origin of Moral Virtue* の中で、“that Macedonian Madman” という表現を用いている<sup>26</sup>。1734年には、Pope も *An Essay on Man* に於いて、

Look next on Greatness; say where Greatness lies?  
 ‘Where, but among the Heroes and the Wise?’  
 Heroes are much the same, the point’s agreed,  
 From Macedonia’s madman to the Swede;  
 The whole strange purpose of their lives, to find  
 Or make, an enemy of all mankind!<sup>27</sup>

と、Mandeville の用語をそっくり踏襲している。そして、Fielding も1739年11月付の *The Champion* 紙上で、Alexander を “that Madman. . . who disdain’d any Father but Jupiter.”<sup>28</sup> と呼び捨てている。これら一連の流れから、17世紀後半から18世紀前半にかけて極端な Alexander 攻撃が盛り上がりを見せていることは否めないものの、その攻撃には伝統的な素地があったことが確認できる。Fielding は、他にも多くの所で、Alexander を酷評しているが、ここでは、最も強烈な “Had Alexander been entirely defeated in his first battle in Asia, he would have been called only a robber by posterity.”<sup>29</sup> を引用するだけに止めておく。肝腎なことは、Fielding が伝統的な Alexander 観を受け継ぎながらも、決して鵜呑みはしていないこと。つまり、古い Alexander 観を土台にして彼独自の “great-

ness” 観を展開していることである。

#### IV

Alexander の “false greatness” を、Fielding はどのように扱っているのか。彼が、詩の題材としても取り上げている “true greatness” と “false greatness” の違いに注目しながら論じることにする。そのために、Fielding の数ある Alexander 攻撃の中から、その非難の原因を暗示するような箇所を抽出しておこう。Fielding の作品の中で、二度にわたって大々的に Alexander を糾弾する役を仰せつけられているのは、キニク派の哲人 Diogenes である。けれども、彼は、Allworthy や Dr. Harrison と違って、Fielding の思想の代弁者ではない。*Dialogue* に於いても、彼自身、羨みや憎しみゆえに罵る人間、自らの自尊心を満たすために共同体から逃避した人間として、Alexander に痛罵されているからである。Diogenes の発言に、Fielding の真意がそのまま表されていると速断するのは危険な気もする。しかし、当初、非難する側にいた Diogenes と非難される側にいた Alexander の立場がいつしか入れ替わり、どちらにも “greatness” は存在しないことを仄めかすことが、*Dialogue* における Fielding の目的であるのだから、双方の攻撃の中に相手の弱点が最大限に盛り込まれていると考える方が自然であろう。

自分が人を罵るのは愛の顛れである。悪徳に悪口雑言を浴びせて人を恐れさせ、“the Road of Virtue (p. 231)” を歩ませることが他人を罵る目的であると、Diogenes は *Dialogue* の中で宣言している。そして、真の名誉というもの (great man が獲得する報酬) は、Alexander が信じているような “the Breath of that Multitude” や “the Applause of their [such heroes as Alexander’s] Slaves and Sycophants (p. 230)” にあるのではなく、“the secret Satisfaction of our own Minds (p. 229)” に存在するもの、“it [true Honour] is the Shadow of Wisdom and Virtue, and is inseparable from them. . . (p. 229)” と説いている。これに対し、Alexander

は、“Wisdom”や“Virtue”の実体が解らぬままでは、その影のような存在のことは理解できないと、やり返す。ここで Diogenes は、「“Wisdom”や“Virtue”は国々を荒らし廻り、都市を焼き払い、人々から略奪し彼らを虐殺することでない」と、さらに激しい Alexander 攻撃を続行する。が、“Wisdom”や“Virtue”の意味を Alexander に教示するまでには至らない。Fielding の真の代弁者ではなく、暴露されるべき致命的な欠点を背負いつつ、相手の悪徳を暴露することだけを使命としている Diogenes の限界であろう。「人々に悪態をつくことが、“Wisdom”や“Virtue”を意味するのではないだろう」という Alexander からの手痛い逆襲に遭っていることから、このことが察せられる。

征服者、権力に満ちあふれた政治家、高慢で羨ましがり屋の哲学者、街学的な学者、利己的な商人のいずれの心の中も“true greatness”の在処ではないことを主張する作品 *Of True Greatness* という詩に於いても、Diogenes は、

But hadst thou, *Alexander*, wish'd to prove  
Thy self the real Progeny of *Jove*,  
Virtue another Path had bid thee find,  
Taught thee to save, and not slay Mankind.<sup>30</sup>

という形で、ゼウスの子であると標榜していた Alexander に“Virtue”が備わっていないことを攻撃材料にしている。そして、幾多の破壊と虐殺の上に積み上げられた世界制覇を偉業と呼ぶことができるのか、そのような所業をなした人間を“great”と呼ぶことができるのか、と、Alexander には、“true greatness”と言うべき資質がないことを指摘している。しかし、Diogenes は、ここでも社会から逃避した高慢な人物として描かれ、“A peevish sour perverseness of the Will,/Oft we miscall Antipathy to Ill.”<sup>31</sup>と結論付けられているので、やはり Alexander の悪徳を暴露する人に止まっていて、Alexander に“the Road of Virtue”を会得させる賢者には、な

れないでいる。

*Of True Greatness* という詩は、“True Greatness lives but in the noble Mind”<sup>32</sup> という一文で決着が付けられ、それ以後、政治・法律・神学といった各分野の “great man” の名前が列挙されて、竜頭蛇尾とでもいうべき George Dodington への長い賛辞で終わっているのです。“noble Mind” の内容は吟味されぬまま放置されている。これでは、Alexander を際限なき破壊の象徴とした Fielding の真意が不明のまま残ってしまう。Alexander の “greatness” の一体どこが “false” であったのか。Fielding が Diogenes に、二度までも使用させた “Virtue” という語を基軸にして考えてみたい。

一口に、“Virtue” といってもいろいろな意味があって、厄介な問題になりそうである。しかし、*Miscellanies* が発刊された1743年前後の Fielding に限って考える場合、答えは容易に見出される。彼は、“Virtue” という語に特別な意味を託していた。1740年1月3日付の *The Champion* 紙上で、“I do not know a better general definition of virtue, than it is a delight in doing good . . . .”<sup>33</sup> という “Virtue” の一般的な定義が披露されている。また、*Miscellanies* に掲載されている *Of Good Nature* という詩の冒頭部分には、“Is it [Good-nature] not Virtue's Self? A Flow'r so fine/It only grows in Soils almost divine.”<sup>34</sup> と記されている。以上のことから判断すると、Fielding の “Virtue” が “Good-nature” そのものを指すことには、疑いを差し挟む余地がない。他の種類の “Virtue” も考えられるのではないかという反論も、以下の引用文の前では無力化してしまう。

Whereas all other virtues without some tincture of this [good-nature], may be well called *splendida peccata*; for the richer, stronger, more powerful, or more knowing an ill-natured man is, the greater mischiefs he will perpetrate; it is ill-nature, with these qualities, which hath fettered and harassed mankind; hath erected the tyrant's throne, hath let loose the conqueror's two-edged sword . . . hath

sent abroad fire and sword and faggot, to ravage, burn, depopulate and enslave nations . . . .<sup>35</sup>

“Good-nature”こそが、枢要徳の最たるもの。Alexander に大規模な破壊活動を行なわしめた本当の原因は、“Good-nature”の欠如にあったのだ。しかしながら、それでもなお、安閑としておれない事情がある。Plutarch 以来すべての Alexander の伝記作者が語り伝えている、Alexander の温情に溢れる行為を如何に解釈するべきかという問題が、生じてくるからだ。確かに、Alexander は、イッソスの戦いで捕虜にしたペルシャ王 Darius の妃や娘たちに指一本触れていない<sup>36</sup>。Fielding 自身もこの行為が、Alexander の“greatness”（勿論、“false greatness”をさすのだが）を傷つけていると、指摘している<sup>37</sup>。この矛盾を解決するためには、“Good-nature”の意味をさらに深く検討し、単なる善行に伴う喜び以上のものであることが明らかにされねばならない。

先ず、Fielding の“Good-nature”の定義をもっと詳しく見てみよう。*Miscellanies*に掲載されている *An Essay on Knowledge of Characters of Men* という随筆によれば、それは、次のような気質である。

Good-Nature is that benevolent and amiable Temper of Mind which disposes us to feel the Misfortunes, and enjoy the Happiness of others; and consequently pushes us on to promote the latter, and prevent the former; and that without any abstract Contemplation on the beauty of Virtue, and without the Allurements or Terrors of Religion.<sup>38</sup>

他人の幸、不幸を感じ取り、前者を推進し後者を阻止しようとする気質であることが、よくわかる。愛する Sophia Western が、Blifil と結婚することが決定的という苦境にあっても、Miller 夫人の一家を救うために奔走することに、非常な喜びを感じている Tom Jones (*Tom Jones*, 第15巻第8章) の精神構造が、この気質に該当する。しかし、ここで大切なのは、定義の後

半部分、難しい哲学や宗教の力を借りなくとも、そのような気質が保持されることであろう。つまり、キリスト教徒として開眼する以前の Booth が信じていたように<sup>39</sup>、“Good-nature”は人間の行動を常に支配する“ruling passion”として捉えられている。

このような観点から考えると、Alexander の行動を“Good-nature”の顯れと見做すことはできなくなる。というのは、彼に反旗を翻したテーベの町を徹底的に破壊して略奪し住民三万人を奴隸として売り払った行為や、酒席での争いで大切な部下 Cleitus を殺戮したことなどは、“Good-nature”の備わった人間にはできぬ所業であるから。Alexander の温情に関して、Fielding は Diogenes に、“Thy Clemency is Cruelty. Thou givest one what thou hast by Violence and Plunder taken from another: And in so doing, thou only raisest him to be again the Mark of Fortune's Caprice, and to be tumbled down a second Time by your self . . . . (p. 231)”と扱きおろさせているが、至言である。Alexander の示した温情は、Fielding の“Good-nature”に照らし合わせると、単なる気紛れだった。Alexander は、“Good-nature”を欠いた“great man”だったのだ。

Fielding は、*Miscellanies* の序文で、“greatness”と“goodness”の構成要素の違いに言及している。慈愛・名誉・誠実といったものが、人を善人にするのであり、人を偉大にさせるのは才能・勇気といった全く別の要素であるはず。にもかかわらず、世の人々は、しばしば“greatness”と“goodness”を混同し、とりわけ、“greatness”に“goodness”の要素が伴っているように誤解してしまうという、彼独自の“greatness”観が紹介されている。<sup>40</sup>この説に従って、Fielding は人間を三種類に分類する。Heartfree のように才覚には恵まれていないが、善良な人物。Wild のように、知恵や才能には恵まれていたが“goodness”を欠いた人物。三番目は、Fielding が“the True Sublime in Human Nature”と呼び、理想的な存在と考えていた“the Great and Good man”である。Alexander の属性が二番目であるこ

とは、言うまでもない。彼に素晴らしい軍事的才能があり人一倍勇気があったことは認めねばならぬが、“a Good Heart”<sup>41</sup> が備わってなかったために、彼は真の偉大な人になれないでいる。世の中には、発揮のされかた如何で美德にも悪徳にもなる資質がある。武勇や知恵は善良な人によって保持されている間は、尊敬の的となるが、別の気質と合体するとその保有者は、大きな禍をもたらし、社会の敵となるのである<sup>42</sup>。善良さを欠いた優秀な武人——Alexander——が、Fielding の眼には、ただの破壊者と映っていた本当の理由はここにある。

## V

Fielding は、“false greatness” を告発することが得意であったようだ。乃至は、それを暴露して庶民を教化することにより大きな意義を見出していたと思われる。例えば、*Jonathan Wild* では、Wild の“false greatness”と Heartfree の“goodness”とが、くっきりと浮き彫りにされている。また、*Dialogue* に於いては、Alexander と Diogenes を通して二種類の“false greatness”を見事に提示している。しかしながら、真の偉大さに関しては、“the Great and Good”とか“the Union of good Heart with good Head”といった観念的な説明はあるものの、その概念を体現しているような人物を創り上げてはいない。これでは、Fielding の理想とする人物に、如何に彼の“greatness”観が反映されているのかが、不明のままになってしまう。Fielding の数少ない真に偉大な人物への言及を踏まえた実地検証を試みる必要がある。

本当の意味で偉大な人物についての Fielding の発言は、ほとんどの場合、名前の列挙（Socrates や Brutus）又は、Fielding に関わりのあった人物（Littleton や Argyle など）への賛辞に終わっている。が、わずかに四行ではあるが、唯一具体例を明示している箇所がある。この人物は、王ではなかったが Alexander とほぼ同じ分野で偉功をたてた人であるので、十分検討す

るに値する。Of True Greatness の問題の四行を見てみよう。

Not on such Wings, to Fame did Churchill soar,  
For Europe while defensive Arms he bore.  
Whose Conquests, cheap at all the Blood they cost,  
Sav'd Millions by each noble Life they lost.<sup>43</sup>

少し補って読まないといけない。この四行は、Alexander のたてた偉功を“Great” と言い得るのかという一節に続く部分であるので、“on such Wings” とは、Alexander が行なったような破壊・略奪・虐殺と解釈しておけばよい。Churchill とは、John Churchill、初代 Marlborough 公爵のことである。Fielding は、この人物に絶えず賛辞を送り続けていた。ここでは、それらを要約して Marlborough が“good Head” と“good Heart”の結合した、Fielding にとっての理想の人間であったことを例証することにする。

Fielding の讃えた Marlborough の功績は、“For Europe while defensive Arms he bore” という一節からも解るように、18世紀版の Alexander である Louis 14世や Charles 12世の手からヨーロッパを守ったことである。この言い方は、いささかオーバーな気もするが、少なくともイギリス・オランダといったプロテスタント諸国に、彼が貢献したのは確かである。そして、侵略王たちの野望を阻止する際に、彼の“good Head”——Fielding の定義によれば、才能や勇氣——が役立った。

先ず、革命的な新戦略の使用を挙げることができよう。敵の要塞を包囲して、活路を見出すという従来の攻城戦は、兵力の温存を図りつつ戦うという利点はあるものの、一つの要塞を攻め落とすにも膨大な時間がかかる。これでは、はるばるイギリスから大陸へ率いて来ている部隊を疲れさせるだけであるし、長期間にわたる戦闘を繰り返しているうちに、国際情勢ならびに国内情勢が一変してしまっていて、彼の軍事行動が徒労になってしまいかねない。Marlborough の戦略を、彼の子孫である Winston S. Churchill は、“He



was entirely modern. The offensive, the aggressive, the grand, sharp decision in the open field, and the rest would follow, as Napoleon would say, *par surcroit*."<sup>44</sup> と評している。百年ほど時代を先取りしていたことになる。Blenheim の戦いで輝かしい勝利は、野戦の賜。かくして、Louis 王の進撃はくいとめられた。

Charles 12世の野心を阻んだのは、Marlborough の別の才能であった。ポーランドを制圧した Charles は、その余勢を駆ってヨーロッパの中心部サクソニアに駐屯した。この血氣盛んな25歳のスウェーデン王の武力を当てにして、各国が使者を送るが Charles は、態度を決めかねていた。Marlborough も彼のサクソニア進出を危惧し、Charles のスペイン継承戦争への介入を避けたいと考えていた。1707年4月、Marlborough と Charles との会見が実現する。この時に、Marlborough が採った策は、無策の策であった。彼は、何一つ具体的な提案をすることもなく、ただ世間話をしただけである。

When he [Marlborough] spoke to him [Charles] of war in general, he thought he perceived in his majesty a natural aversion to France; and remarked that he talked with pleasure of the conquests of the allies. He mentioned the czar to him, and observed that his eyes always kindled at the name, notwithstanding the calmness of the conversation. Besides, he saw a map of Muscovy lying before him on the table.<sup>45</sup>

あせって相手を下手に刺激することなく、長年の経験と巧みな洞察力によって、Charles の真意がロシア侵略にあることを、探り出したのである。このように、軍人としての、また、政治家としての才覚という点で、Marlborough は、Louis や Charles を凌駕していた。“Great” は、Marlborough に与えるに値する称号であろう。

次いで、Marlborough が“good Heart”の持ち主であったことを述べて

おかねばならない。例の四行の後半部分, “Whose [Marlborough’s] Conquests, cheap at all the Blood they cost,/Sav’d Millions by each noble Life they lost.” の解釈が、問題となる。Marlborough の戦場で流された血が極めて少なかったこと、ごくわずかな尊い犠牲で何百万もの人々を救ったのだと、理解しておけばよいであろう。犠牲が少なかった理由は、司令官というより、人間 Marlborough の部下への思いやり——他人の幸福や不幸を感じ取り、前者を押し進め後者を避けるといった “Good-nature” の顕れ——にある。

1704年、彼の率いるイギリス・オランダ連合軍は、Blenheim で決戦をすべく、ライン河沿いに南下するといった陽動作戦にでた。オランダのハーグから中部ドイツまでの大行軍であった。その際にも、大量の医療資材や人馬のための補給品が現地で入手できるように配慮されていたことは、従軍した Parker という大尉の回想録に記されている<sup>46</sup>。また、1711年の Bouchain の戦いの時に、Marlborough が示した態度は、彼の一兵の命たりとも疎かにせぬ姿勢を十分に物語っている。Bouchain の要塞を包囲したい Marlborough は、それを阻んでいる塹壕をめぐるしたフランス軍を、部下に丘の上から攻撃させようとした。その時、単身で丘の上に現われた Marlborough は、自らの観察によって成功の見込みがないと知るや、その部隊を退却させて一人の負傷者も出さなかったというエピソードが、やはり、Parker 大尉によって伝えられている<sup>47</sup>。Winston S. Churchill も、

We found him [Marlborough] at sixty-one, in poor health, racked with earache and headache, after ten years of war, making these personal reconnaissances within deadly range of the enemy’s entrenchments and batteries in order to make sure that his soldiers were not set impossible tasks and their brave lives not cast needlessly away.<sup>48</sup>

と、体調が悪いにもかかわらず、単身偵察行に赴いた祖先の榮譽を讀んでいる。このような Marlborough の気質は、広く知れ渡っていたに違いない。1707年生まれの、スペイン継承戦争についての記憶が殆どないはずの、Fielding でさえ知っていたようだから。1743年に *Miscellanies* の第二巻として出版された、*A Journey from This World to the Next* の中で、彼は Marlborough に触れている。主人公が死んで、極楽浄土へと旅する途中で、死神の国に立ち寄る。そこには、死神の皇帝の素晴らしい宮殿があり、部屋という部屋の壁がさまざまな戦争を織り込んだタピストリーで飾られていた。イギリス人である主人公は、Marlborough が大勝利を収めた Blenheim の戦いのそれを探すのであるが、見つからない。その場に居合わせた骸骨に尋ねると、Louis 14世という紳士（黄泉の国で、死神の役を仰せつかっている）が、大の Marlborough 嫌いで、Blenheim の戦いのタピストリーを掛けさせないでいることが、判明する。と共に、Louis の Marlborough 嫌いの理由を、“... his majesty [Louis XIV] hath no great respect for that Duke [Marlborough], for he never sent him a subject he could keep from him, nor did he ever get a single subject by his means but he lost 1000 others for him.”<sup>49</sup> と解説してくれている。大切な部下を安易に死神に引き渡そうとしなかった Marlborough の姿が眼に浮かぶようである。

ギリシャからインドに至る広大な帝国を作り上げたとはいえ、その間に多くの都市を破壊し多くの人々を死に追いやった、Alexander 大王や、在位中四度も侵略戦争を試みたフランスの Louis 14世、領土獲得に意欲は燃やさなかったものの、征服者としての悪名がヨーロッパに響き渡っていたスウェーデン王 Charles 12世。そして、Marlborough。これら四人のいずれもが登場する作品がある。Fielding の描く死者の国の話である<sup>50</sup>。先に述べた通り、Louis 14世は、死神の役。勿論、Alexander や Charles も死神の役である。しかも、彼らはただの死神ではなく、死神の国の皇帝の側近を務めると

いう榮譽を担っている。これに対して、Marlborough は、死神から嫌われる役を貰っている。こういったキャスティングにも、Fielding の “greatness” 観が反映していることを見逃してはならない。これこそ、Marlborough は “good Head” と “good Heart” を兼ね備えた真の偉大な人物であると、Fielding が考えていたことを示す証左となるであろう。

Marlborough には、James 2世への裏切り、スチュワート亡命政権との関係、フランスとの講和の媒介者になるよう Louis 14世に買収されていた等の悪い噂も付きまとい、決して彼を完璧な人間と見做すことはできない<sup>51</sup>。しかし、少なくとも、Fielding にとっては、Alexander や Jonathan Wild (定立—“false greatness”) に対峙する Heartfree (反立—“goodness”), 彼らを止揚させた総合——“true greatness——が Marlborough だという、“greatness” の弁証法が成り立っていたのではないだろうか。

(本稿は、1988年10月に日本比較文化学会関西支部例会にて、「Fielding の greatness 観」と題して行なった口頭発表に加筆し、改題したものである。)

## 註

1 Plutarch, *Plutarch's Lives*, trans. Bernadotte Perrin (“the Loeb Classical Library,” London: William Heinemann, 1967), VII, 259.

2 例えば、ローマ時代(2世紀)の Alexander 研究書である *Anabasis of Alexander* の訳者 P. A. Brunt は、この会談に関して、次のような註を付けている。

As the date of Diogenes' death is unknown, a meeting cannot be excluded on chronological grounds but, like other anecdotes about Diogenes and Al., this is surely late and apocryphal. (Arrian, *Anabasis of Alexander*, Vol. II of *History of Alexander and Indica*, trans. P. A. Brunt [“the Loeb Classical Library,” London: William Heinemann, 1976], 205n)

また、Robin Lane Fox の *Alexander the Great* (London: Futura, 1978) では、このエピソードは以下のように扱われている。

... Alexander saw him [Diogenes] and asked if there was anything this abject figure wanted. Yes, replied Diogenes, stand aside a little, for you are

blocking the sun. One of his pupils later joined Alexander as an admiral and wrote a colourful history, including the story of this meeting, but it was probably his fiction that Alexander went to comment: 'If I had not been Alexander, I would like to have been Diogenes.' (p. 71)

- 3 Ethel Margaret Thornbury, *Henry Fielding's Theory of the Comic Prose Epic* (Madison: University of Wisconsin Press, 1931) に付録として記載されている Fielding の蔵書リストの項目番号367, 578, 627を参照のこと。
- 4 Henry Knight Miller, *Essays Fielding's Miscellanies: A Commentary on Volume One* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1961), p. 390.
- 5 Henry Fielding, *A Dialogue Between Alexander the Great and Diogenes the Cynic in Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, ed. Henry Knight Miller ("the Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Oxford: the Clarendon Press, 1972), p. 226. 以下この作品を *Dialogue* と略記し、そこからの引用はその直後の括弧内にページ数のみを記す。
- 6 Henry Knight Miller, p. 408.
- 7 Henry Fielding, *The History of the Late Mr. Jonathan Wild the Great*, ed. Douglas Brooks ("Everyman's Library Edition," London: Dent, 1976), p. 4.
- 8 *Ibid.*, p. 51.
- 9 *Ibid.*, p. 42.
- 10 「征服者・墮落した首相や政治家・泥棒の祝分の三者は、いずれも計り知れない利己心に支配されているという点で同じであり、彼らの唯一の違いは、邪悪な目的を遂げるために利用する部下の数の多寡にある。」という見解を、F. Homes Dudden は、その *Jonathan Wild* 論で明らかにしている。(*Henry Fielding: His Life, Works, and Times* [Oxford: Clarendon Press, 1952], I, 467)
- 11 *Ibid.*, I, 464-465.
- 12 Donald F. Bond ed., *The Spectator* (Oxford: the Clarendon Press, 1965), II, 208.
- 13 Henry Fielding, *The Vernoniad in Miscellaneous Writings*, Vol. XV of *The Complete Works of Henry Fielding, ESQ*, ed. William E. Henley (New York: Barnes & Noble, 1967), p. 42.
- 14 Voltaire, *History of Charles XII*, in Vol. XI of *The Works of Voltaire*, trans. William F. Fleming (New York: Dingwall-Rock, 1927), pp 5-6.
- 15 *Ibid.*, p. 8.
- 16 Voltaire, *History of the Russian Empire under Peter the Great* in Vol. XVIII of

- The Works of Voltaire*, trans. William F. Fleming (New York: Dingwall-Rock, 1927), p. 16.
- 17 Aurélien Digeon, *The Novels of Henry Fielding* (London: Routledge, 1925. Reprinted New York: Russell & Russell, 1962), p. 101a.
- 18 *Ibid.*, p. 100.
- 19 Wilbur L. Cross は, Fielding 自身が署名している翻訳料のレシートに基づいて, Fielding がこの翻訳に関わったと推定している。詳しくは, Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (New Haven: Yale University Press, 1918. Reprinted New York: Russell & Russell, 1963), I, 284-287 を参照のこと。
- 20 F. Homes Dudden, I, 289-290.
- 21 William Robert Irwin, *The Making of Jonathan Wild: A Study in the Literary Method of Henry Fielding* (Hamden, Connecticut: Archon Books, 1966), p. 49.
- 22 Juvenal, *Satire X* in *Juvenal and Persius*, trans. G. G. Ramsay ("the Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1979), p. 207.
- 23 Michel de Montaigne, *Les Essais* in *Œuvres Complètes de Michel de Montaigne* ed. A. Armaingaud (Paris: Louis Conard, 1926) に以下のような記述が見られる。  
Je le [Cæsar] trouve un peu plus retenu et considéré en ses entreprises qu' Alexandre: car cettuy-cy semble rechercher et courir à force les dangers, comme un impetueux torrent qui choque et attaque sans discretion et sans choix tout ce qu' il rencontre . . . Aussi estoit-il embesoigné en la fleur et première chaleur de son aage, là où Cæsar s'y print estant des-jà meur et bien avancé. Outre ce qu' Alexandre estoit d'une temperature plus sanguine, colere et ardente, et si esmouvoit encore cette humeur par le vin, duquel Cæsar estoit tres-abstinant . . . (IV, 432-433)
- 24 Nicolas Boileau, *Satire VIII* in *Boileau. Œuvres Complètes*, ed. Françoise Escal ("Bibliothèque de la Pléiade," Paris: Gallimard, 1966), p. 43.
- 25 Voltaire, *History of Charles XII.*, p. 193. 尚, そこでは, Boileau のことが, Despréaux と表記されている。Despréaux は, 当時, 諷刺作品を手懸けて文壇の寵児であった兄, Gilles Boileau と区別するために使われていた名前である。
- 26 Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees. or, Private Vices, Publick Benefits.* ed. F. B. Kaye (Oxford: the Clarendon Press, 1924), I, 55. Mandeville は, Alexander 大王に関する情報や "Macedonian Madman" という表現を, 17世紀のフランスの哲学者 Pierre Bayle の *The Dictionary Historical & Critical* や *Miscellaneous Reflections* から引用していることが, F. B. Kaye によって指摘されている。

- 27 Alexander Pope, *An Essay on Man*, Epistle IV, ll. 217-222 in *Pope: Poetical Works*, ed. Herbert Davis (Oxford: Oxford University Press, 1978).
- 28 Henry Fielding, *The Champion*, November 17, 1739. この日付の *Champion* 紙は, Henley 版の全集に収録されていないので, William Robert Irwin, p. 66 から転載した。
- 29 Henry Fielding, *The Champion*, March 4, 1739-40 in *Miscellaneous Writings*, Vol. XV of *The Complete Works of Henry Fielding, Esq.*, p. 229.
- 30 Henry Fielding, *Of True Greatness: An Epistle to George Dodington, Esq.* in *Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, p. 21.
- 31 *Ibid.*, p. 21.
- 32 *Ibid.*, p. 28.
- 33 Henry Fielding, *The Champion*, p. 136.
- 34 Henry Fielding, *Of Good-Nature: To his Grace the Duke of Richmond.* in *Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, p. 30.
- 35 Henry Fielding, *The Champion*, March 27, 1740, pp. 259-260.
- 36 Plutarch, pp. 283-285 や 1 世紀のローマの雄弁家 Quintus Curtius, *History of Alexander*, trans. J. C. Rolfe ("the Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1946), I, 143 を参照のこと。
- 37 Henry Fielding, *Jonathan Wild*, pp. 4-5.
- 38 Henry Fielding, *An Essay on Knowledge of Characters of Men* in *Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, p. 158.
- 39 宗教や道徳による動機付けがなくとも情け深くやさしい人間, その人を支配している情念が全く善である人間こそが立派なのだという, Booth の確信は, 彼が理想的な人物であると考えていた Colonel James の正体が暴露されて崩壊し, 彼は宗教による動機付けの必要性を痛感する。(このことについては, 拙稿「Booth の思想遍歴—そのキリスト教徒としての開眼—」『主流』第46号を参照されたい) 但し, これは, 1752年の *Amelia* の中で Fielding が明らかにしている見解。*An Essay on Knowledge of Characters of Men* が出版された1743年の時点では, Fielding は宗教の重要性をそこまで認識していないように思われる。
- 40 Henry Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, pp. 11-12.
- 41 *An Essay on Conversation* に於いて Fielding は, "real Greatness, which is the Union of a good Heart with a good Head" と定義している。(*Miscellanies by Henry Fielding, Esq; Volume One*, p. 135)
- 42 Henry Fielding, *The Champion*, January 3, 1739-40, p. 134.

- 43 Henry Fielding, *Of True Greatness*, p. 23.
- 44 Winston S. Churchill, *Marlborough: His Life and Times* (London: George G. Harrap, 1947), II, 225.
- 45 Voltaire, *History of Charles XII.*, p. 141.
- 46 Winston S. Churchill, I, 758.
- 47 *Ibid.*, II, 861.
- 48 *Ibid.*, II, 861.
- 49 Henry Fielding, *A Journey from This World to the Next* ("Everyman's Library Edition," London: Dent, 1973), p. 22.
- 50 *Ibid.*, pp. 20-23.
- 51 Fielding の Marlborough への賛辞がシニカルな意味合いを持つものでないことは、*A Journey from This World to the Next* での Marlborough の扱いの他に、次の二点を考慮に入れば明白になる。先ず、*Of True Greatness* で Marlborough と同列にして "true great men" として称賛されている人物は、神学・法学・政治などの分野で Fielding が一目置いていた人物である。(Fielding は、Chesterfield に *Don Quixote in England* を、Lyttleton に *Liberty* という詩や *Tom Jones* を献呈しているほどである。) Marlborough だけが例外的に皮肉られていたとは考え難い。また、Marlborough 公爵夫人の出版した *An Account of the Conduct of the Dowager Duchess of Marlborough* が不評であり各方面から攻撃の的とされた時に、Fielding は自ら *A Full Vindication of the Duchess Dowager of Marlborough* (*Miscellaneous Writings*, Vol. XV of *The Complete Works of Henry Fielding, ESQ.*, pp. 7-34) というパンフレットを発表して彼女を救ったという経緯もある。そして、このパンフレットの中にも、Fielding の Marlborough への賛辞が散見される。



## Synopsis

# Henry Fielding's View of "True" Greatness —Alexander the Great and the Duke of Marlborough—

Masahiro Minai

The famous meeting between Alexander the Great and Diogenes the Cynic, which is reported to have taken place in 336 B. C., has stimulated the imagination of many ancient writers. Cicero and Seneca as well as Plutarch, Arrian, and Curtius, Alexander's biographers, referred to it in their works. Lucian, a Greek satirical writer, adopted the topic in his *The Dialogue of the Dead*. Henry Fielding inherits the literary tradition mainly from Lucian and made a Lucianic sketch based on the meeting. His sketch is named *A Dialogue Between Alexander the Great and Diogenes the Cynic* and is published in *Miscellanies* in 1743.

The decided difference between his sketch and the ancient predecessors' lies in his presentation of the famous meeting. Fielding takes care that the meeting may take place after Alexander's anabasis and emphasizes that Alexander's empire results from the destruction and mischief done by him; Fielding's aim is to make it clear that Alexander shares the same anti-heroic qualities as Jonathan Wild. Fielding tries to prove their types of "greatness" are both false.

The following historical background must be remembered when we discuss the reason why Fielding introduces into his work the conqueror

who has been dead for about 2,000 years. From the late seventeenth century to the early eighteenth, two great conquerors—Louis XIV in France and Charles XII in Sweden—invaded the countries around them; their appearance became a menace to the peace and security of England and the continent. Contemporary moralists and political writers, who began to be conscious of the fearful threat equally, made the most popular historical personage the object of their condemnation. Needless to say, Alexander the Great was the representative of those criminal conquerors, because he was admired, applauded, and deified by deluded multitudes solely for his extraordinary military successes, in spite of the devastation he caused. The popular image of Alexander as the epitome of ruthless and overriding ambition is reflected in the phrase, "Alexander madman," common to Boileau, Mandeville, Pope and Fielding.

It is, however, undeniable that Fielding gives his own color to his sketch when he attacks Alexander's "false greatness." Diogenes is assigned the role of pointing out that Alexander is a great man deficient in "virtue." In Fielding's opinion—especially in 1743—"virtue" means "good-nature." Alexander is never gifted with the benevolent and amiable temper which disposes him to feel the misfortunes, and to enjoy the happiness of others. In the preface of *Miscellanies*, Fielding analyzes the ingredients of "greatness" and "goodness"; it is "parts" and "courage" that are efficient qualities of "greatness," while "benevolence," "honor, and "charity," of "goodness." Notwithstanding this deepest analysis of Fielding's, the public at large confound the former with the latter. They even feel as if "greatness" were always accompanied by "goodness." Indeed, Alexander may be full of military parts

and sufficiently brave to establish the greatest empire by arms, but he cannot become a "truly great man—the great and good man" because he is not endowed with a good heart.

Fielding defines his own view of "true greatness" as "the Union of good Heart with good Head." But he is far from creating a character who is the embodiment of his ideal. In most cases, he ends in enumerating names of real great men: Socrates, Brutus, Chesterfield, and Lyttleton. It is very difficult for us to verify the validity of his theory. Fielding, however, introduces into his poem *Of True Greatness* the Duke of Marlborough as a great man in contrast to Alexander the Great. The careful examination of his eulogies for Marlborough will reveal that he is Fielding's ideal person.